

「東日本大震災 被災地交流ツアー」報告

実行副委員長 秦野高等学校長 神戸秀巳

〔目的〕

- 1 東日本大震災に係る過去から現在までの状況を正しく理解する
※発生の状況、復旧・復興に向けての取組み、現在の状況 など
- 2 学校や地域における防災活動（減災）に役立てる
※自助と共助、防災に向けた学校や地域の取組み、地域連携 など
- 3 他の災害を含め、被災者の心情と未来を見据えた行動について考える
※正しい情報の収集方法、ボランティア、風化と風評の防止 など

- 1 実施日 平成 28 年 7 月 15 日（金）21 時 秦野高等学校を出発
～ 7 月 17 日（日）20 時 30 分 秦野高等学校に到着（+東海大学前駅）
- 2 参加者 38 名（生徒、教職員、保護者、卒業生） + 付き添い看護師 1 名
- 3 行程 岩手県陸前高田市 ⇒ 宮城県気仙沼市 ⇒ 南三陸町・・・移動・・・
⇒ 岩沼市 ⇒ 名取市・・・帰路・・・
- 4 参加費 一人 5,000 円
※不足分は創立 90 周年記念事業の記念ペナント販売による収益より
- 5 ご協力
 - ・村上育朗 様 教育未来研究会「そうぞう」代表 [陸前高田市]
 - ・宮城県気仙沼高等学校 [気仙沼市] + [南三陸町]
小山淳校長、狩野秀明教頭、高橋英勝教頭、佐藤忠司教諭
生徒会の皆様 他の皆様
 - ・宮城県名取高等学校 [岩沼市] + [名取市]
河本和文校長、土生善弘教頭、岩見和泰主幹教諭、小島輝彦教諭、
高橋健一教諭、高橋寿明教諭、村上謙造教諭
一條博之前校長（今年 3 月退職） ※職員 3 名が 3 月に本校を訪問
生徒会の皆様（後述）
 - ・遠藤吉夫 様 宮城県立視覚支援学校校長 [岩沼市] [名取市]
 - ・佐藤正憲 様 宮城県仙台南高等学校教諭 [岩沼市] [名取市]
 - ・認定 NPO 法人「地球のステージ」 「閑上（ゆりあげ）の記憶」
小齋正義（館長） 様、武田絵莉香 様 [名取市]

【「三陸新報」（気仙沼市）取材記事より】

● 7 月 15 日（金） 萬有流転

今月 11 日、東日本大震災から 5 年 4 カ月が過ぎた。「物はいくらあっても不足する。しかし、分かち合えばいきわたり、譲り合えば余りある」は、6 月 9 日、防災避難訓練の講評として、名取高校の土生善弘教頭先生が生徒に話した言葉である▼神奈川県立秦野高

校では、今年創立 90 年を迎えた。その記念事業として、「被災地交流ツアー」を企画した。内容を見るとかなりの強行軍であり、弁当食もあるが、コンビニで夜と朝の分を購入して食べ、名取高校の体育館での「宿泊体験」は、寝具の用意をせずに泊まるという▼生徒や家族、卒業生など 40 人ほどが、陸前高田市から気仙沼市（気仙沼高校・旧気仙沼向洋高校など）、南三陸町を経て名取高校に向かう。きょう 15 日夜に秦野高校を出発し、1泊2日の行程である。震災後、気仙沼高校の教諭をはじめ、多くの人の講演会を開き事実を受け止め、いかにして未来へ向かうかを考える▼秦野高校の姿勢に共感し、どのように震災を伝えていくか、一つの方法を示唆された気がする。参加者は震災を自分のこととしてとらえ、自己の記録としてまとめる。短時間の被災地滞在だが、多くのことを吸収してほしいと思う。

● 7月17日（日）

気高生から体験聞く

神奈川県立秦野高校（神戸秀巳校長）の生徒と保護者、職員らが 16 日、気仙沼高校を訪れ、復興の現状と防災の在り方などを学びながら、生徒同士が友好の輪を広げた。

「東日本大震災 被災地交流ツアー」として、2泊3日（車中1泊）の日程で陸前高田市から名取市までの沿岸各地を訪問。復興の過程や被災地の現状などを学び、学校や地域での防災活動に役立てよう－と企画された。

気仙沼高では震災時の被害状況などの講話を聞いた後、両校の生徒が一緒に昼食をとりながら、親交を深めた。気仙沼高生徒会が、被災直後に体育館が避難所になっていたことや、入学式は中学校の制服で行ったことなど、震災後の学校の様子を説明した。

その後の意見交換では、気仙沼の現状を見た感想や震災時の秦野市での様子などを話しあったほか、普段の学校生活や部活動のことなども、和気あいあいと話していた。

秦野高校1年の寺島泉希さんは「5年4カ月が経過した被災地の現状をこの目で見たい」と思い、初めて気仙沼を訪れた。工事のトラックを見て、復興が進んでいると感じたが、まだまだ途中な印象も受け、これからも応援したいと思った」と話していた。

一行はこの後、南三陸や石巻などを視察し、名取高校の体育館で宿泊体験を行った。

【参考】 平成 23 年 3 月 11 日 宮城県気仙沼高校の様子 ※「学校の記録」より

3月11日（金） 晴れのち曇り、夕方は時々雪 3月授業（生徒登校日）

※標高 40.3m [気仙沼市ホームページ「避難所・避難場所について」より]

この日の午後、教務部員は小会議室で仕事をしていた。午後2時46分（生徒は放課後）に地震発生。皆、机の下にかくれて揺れがおさまるのを待った。やっと揺れがおさまって小会議室を出て職員室へ行くと、めっちゃめっちゃに散らかった状態。校舎内にいた生徒を硬式野球グラウンドに出して集合・点呼。（避難訓練の要領に従った。）クラスごとに整列させ、その場にいる生徒を名票でチェックした。生徒は約 300 人いた。（校内の教職員は 63 人）

その後、市民が続々と本校硬式野球グラウンドに避難してきた。15時10分には津波が発生した。結局、約 1,000 人の市民が本校へ避難。野球部員が市民のためにイスや簡易テントを出して休憩場所を設置して、お年寄りや子どもを休ませたが、その後、雪が舞う天候となったので、武道場に誘導した。それだけでは場所が足りないなので、柔道場、第2体育

館も段階的に開放するに至った。（その後、これらの場所が避難所となった。中にはペットの犬を連れてくる市民もいた。）自家用車で避難してくる市民もいたので、職員、生徒で駐車場誘導を行い、避難所に案内した。（最終的に約 300 台になった。）

本校としての対策本部を職員玄関に設置。管理職は県教委、気仙沼市役所などと連絡を取った。（また、この後数日にわたり、必要と思われるタイミングで職員打ち合わせを主宰した。）冬のように雪が無い寒かったので、避難所にストーブを搬入。職員が手分けして、校舎内のカーテンをすべてはずして、毛布がわりに避難所に提供。敷物がわりに新聞紙も提供するなど、できる限り身体の保温に役立つ措置をとった。また、この日、可能な範囲で生徒の保護者への引渡しを行った。引渡しができずに学校へ宿泊した生徒は 225 人ほどだった。（第 2 体育館に宿泊）学校は停電、断水の状態。

夕方（4 時頃？）から湾岸地域が炎上して、東の空が炎の色に染まった。午後 9 時過ぎに NHK の車が本校に到着して取材を要請。突然の来校で、現場もまだまだ落ち着いていないので、要請は受け入れず、取材は後日にしてもらおう。本校への市民の避難は途切れずに深夜まで続いた。職員は夜通し駐車場誘導などを行い、焚き火で暖をとりながら、朝方まで過ごした。生徒もよく頑張ってくれた。

【何をしたのか】

7月16日（土）

○岩手県陸前高田市

・到着（午前 6 時頃）

市役所、JR 陸前高田駅（BRT）

※以後は村上育朗先生による案内 午前 8 時～10 時 40 分

- ・「一本松茶屋」駐車場 ⇒ 奇跡の一本松
- ・気仙地区（気仙川を渡り、下流⇒上流へ）
- ・岩手県立高田高校周辺
- ・小泉公民館（村上育朗先生の当時の避難所）
- ・旧道の駅「高田松原」（東日本大震災追悼施設、復興まちづくり情報館）

奇跡の一本松の近く



旧道の駅「高田松原」タピック 45





参加者に説明中の村上育朗先生



奇跡の一本松と破壊されたユースホテル

○宮城県気仙沼市 午前 11 時～午後 4 時 30 分

★気仙沼高校

- ・ 歓迎行事
- ・ 防災講演会

「東日本大震災からの思い・未来へ
地震災害と津波を知る・・・」

講師 佐藤忠司教諭（前進路指導部長）

- ・ (生徒) 気仙沼高校生徒会生徒との交流企画
- ・ (生徒以外) 気仙沼向洋高校に係るプレゼンテーション

講師 狩野秀明教頭（前気仙沼向洋高校教頭）



(左上) 防災講演会講師の佐藤忠司教諭

(左右) 気仙沼高校生徒会長と秦野高校
生徒会長の記念品交換



(左下) 気仙沼向洋高校に係るプレゼン
をする狩野秀明教頭



小山淳（おやまあつし）校長
気仙沼高校には毎年お世話になっています



神戸より生徒会の皆さんにごあいさつ
来年2月にも伺う予定です



生徒会代表者



玄関前での集合写真

★旧気仙沼向洋高校 ※現在の気仙沼向洋高校は気仙沼高校第2グラウンドに仮設校舎



津波襲来時の気仙沼向洋高校



気仙沼向洋高校の現況



事前に説明を受け、細心の注意を払い、見学をさせていただきました



★植樹 ご協力：特定非営利活動法人「海への森をつくろう会」





旧知の気仙沼高校佐藤忠司教諭に声をかけていただき、当初の予定にはなかった植樹をNPO法人「海への森をつくろう会」のご協力により、行うことができました。場所は旧気仙沼向洋高校のすぐ近くです。「私たちは今、美しい自然に満ちた郷土を取り戻す取り組みをスタートさせます。明るい未来のために」とリーフレットに書かれています。

○宮城県南三陸町 旧防災対策庁舎



現在、周辺のかさ上げ工事により、旧防災対策庁舎に近づくことはできません。道路の反対側から、線香を手向け、おまいりさせていただきました。

【参考】

南三陸町 旧防災対策庁舎

3階建てで、地上から高さ12mの屋上に避難場所がありましたが、当初は6mの津波予想で庁内に留まったために、14mの津波により町職員ら43名が犠牲となりました。町災害対策本部が置かれ、防災無線放送により津波来襲時まで計62回にわたり避難を呼びかけた女性職員も犠牲となりました。2015年、町長は2031年までの県有化を受け入れ、被災20年後に保存か解体かの判断をすることにしました。

○宮城県岩沼市 宮城県名取高校 ※武道館にて宿泊
ダンボールをご用意いただきました（敷き布団、掛け布団の代わりに使用）



河本和文校長には、高校野球が延長 15 回同点再試合となった後、遅い時間帯にわざわざ駆けつけていただきました。職員の皆様には学校に泊っていただき、ありがとうございました。翌朝には、大変美味しい豚汁をご提供いただき、皆感動しました。



武道館の半分は畳が敷いてあり、私たちが寝た方は板張りで、をご用意いただいたダンボールを重宝させていただきました。おかげさまで、深い眠りにつくことができました。

7月17日（日）

○宮城県岩沼市

★名取高校 午前8時30分～10時

[生徒対象] ワークショップ「東日本大震災から考えてみよう」

講師・運営 小島輝彦教諭

参加生徒（名取高校） ※敬称略

浅野勇氣（生徒会長）、浅野初穂（副会長）、（執行部）伊藤博輝、堀口和祈、差波丈一郎、大宮歩巳、只野瑠奈、田所裕也、刈屋快斗、西城由莉香、加納利虹（以上11名）

2016/07/16 ◆名取高校ブログより

【秦野高校】被災地交流ツアー

7/16(土)・17(日)に神奈川県立秦野高等学校
神戸秀巳 校長先生はじめ 39 名の生徒・保護者・OBの
皆様が来校しました。

創立 90 周年記念事業の一環として、
「繋がる」をキーワードに気仙沼高校・名取高校を訪れていただきました。

武道館での避難所体験宿泊・生徒交流会等が行われました。

繋がる 全国・世界へ

頑張ろう 秦野高校・名取高校



[大人対象] ミニパネルディスカッション「やがてやってくる震災に備える 他」
出席者 一條博之前校長（今年3月退職）、土生善弘教頭、村上謙造教諭、
遠藤吉夫様（県立視覚支援学校長）、佐藤正憲教諭（仙台南高校）
秦野高校関係者（生徒以外）



一條博之前校長(左)と土生善弘教頭(右)
「名取高校 3歩前へ」



村上謙造教諭 25歳 新採用
期待できる新人です



佐藤正憲教諭(左)と遠藤吉夫校長(右)



県外での非常に珍しい体験です

★集団移転 玉浦西地区（1,000人規模） ※岩沼市は今年4月に全ての仮設住宅を撤去
車窓から見学しましたが、写真はありません

★津波よけ「千年希望の丘」



岩沼市では、沿岸部に多重防御の新しい社会共通基盤として、津波の力を減衰させる津波よけ「千年希望の丘」を整備し、減災に取り組むとともに、後世の人々へ今回の津波被害の大きさや想いをつなぐために、「千年希望の丘」を含めたエリアをメモリアルパークとして整備する計画を進めています。震災により発生したガレキ(再生資材)を活用して丘を築造し、植樹しています。

※岩沼市ホームページより（一部変更）



岩沼市在住の佐藤正憲さんに車中を含めて詳しく説明していただきました

○宮城県名取市閑上（ゆりあげ）地区

★ご協力 認定NPO法人「地球のステージ」 「閑上の記憶」

案内人 小齋正義 様（館長） 調整 武田絵莉香 様

東日本大震災とその後の津波によって、事務局のある宮城県名取市も大きな被害を受けました。事務局の周囲にも津波は押し寄せましたが、震災翌日より2ヶ月間、桑山が院長を務めていた東北国際クリニックにて24時間体制で医療支援に臨みました。2012年4月に津波復興祈念資料館「閑上の記憶」を被災地閑上に開設しました。閑上中学校で亡くなった14名の生徒さんの慰霊碑を守る社務所として、閑上案内ガイドや震災学習の拠点として、現在も活動を続けています。（ホームページより）

被災地である閑上は、多くの方々が犠牲となった場所です。「案内人」の皆様も被災しており、ご家族やご友人を亡くされています。「閑上の記憶」で案内人として、震災やいのちの大切さを伝えるために活動されている方々の存在は大変貴重であり、「震災を語りつぐ」使命をもって役割を担ってくださっています。私たち参加者は一生懸命耳を傾け、事実を受け止め、未来へ向かうために何をすべきかを考えましょう。



参加者の声

『閑上のお話をしてくださった小齋さんの心の広さにも感動しました。自分が被災しているにもかかわらず、支援してくれた人への感謝の気持ちを忘れずに、地元の子どもたちやその保護者の方たちへの心のケアなどお話に涙が止まりませんでした。』



【参考】平成 25 年に遠藤吉夫さん、佐藤正憲さんと訪れた時の関上中学校



【何を感じたのか】 ※参加者の「感想」より

◆今回、「被災地交流ツアー」に参加することができ、本当に良かったと思います。東日本大震災の様子はテレビや新聞等で仕入れた情報のみだったので、実際に被災された現地の先生方にお話を伺い、自分の誤った認識に気づかされた面が多々ありました。また、震災当時のままの気仙沼向洋高校を見学、これも秦野高校だったから経験できたことだと思います。村上育朗先生の『まず、自分が生きることを考えろ』、佐藤忠司先生の『防災・・・正しく恐れる』『命を守るのは瞬時の的確な判断』などなどの貴重なお話は身につまされる思いでした。何より強く感じたことは、復興にはまだまだ時間がかかり、被災された方のお話を伺うこと、現地を見ることが大切で、これらのことを風化させてはいけないということです。帰宅したら、同行できなかった家族や友人にも今回の経験を少しでも伝えていきたいと思います。最後に、このようなすばらしい企画をしてくださり、本当にありがとうございました。関わってくださったすべての方にお礼を申し上げます。

◆名取高校で先生方が作ってくださった豚汁、温かいお気持ちがいっぱい感じられて、本当に美味しくいただきました。被災された方々が炊き出しで温かい食べ物を口にすることができた時は、これ以上の喜びだっただろうと考えながら、いただきました。「ありがとう」の気持ちでいっぱいです。

◆子どもは卒業していますが、思いがけず秦高のツアーに参加させていただくことができ、本当に感謝いたしております。私の父も宮城県出身で、私の第二の故郷である宮城県の現状をずっと気にしていましたが、恥ずかしながら5年という年月に意識も少しずつ薄れつつあったところでした。現地の人々のお話を聞き、改めて意識を確認しました。いつか起こるであろう神奈川の災害に備え、役に立つことが多かったように思います。5年経ってもまだ終わっていない現状に、私たちのできることは微々たるものでしかありませんが、風化させず、これから先もつながっていけたらと思います。温かく迎えてくださった東北の人々の優しさに本当に感謝しています。企画してくださった先生方、誘ってくださった秦高で知り合ったお母さんたち、送り出してくれた家族。今回のツアーに関わってくれた岩手県宮城県の方々、たくさんの方々に感謝申し上げます。貴重な体験をありがとうございました。

◆このツアーに参加して本当に良かったと実感しています。マスコミでの報道と、現地での地元の方との考え方の違いや復興の様子を生で見られて良かったです。東北の方々には試練が大きく、今なお心の傷は癒えていないと思いますが、前向きな精神力、温かい心、おもてなしの心など胸が熱くなるくらい感激しました。一番心に焼きついたのは、気仙沼向洋高校の内部を見られたこと。同じ高校生の子どもの持つ親として、母校がそのような無残な姿になり、生徒もバラバラの生活を強いられ、自宅も被災された子どもたちの心を思うと、涙が出てきました。復興も進んではいますが、元の生活に戻るのはまだまだ時間がかかると思います。私たちに何ができるかをもう一度考える機会となりました。5年以上経ってからのツアー、被災直後よりも考えさせられるものになりました。東北の方々の力になりたい、何かしなければと、また思うツアーになりました。最後に。お世話になった全ての方々、温かいおもてなし、本当にありがとうございました。人と人とのつながりがこんなに嬉しく感じたことは久しぶりでした。私も今の自分を振り返り、人に優しい強い人になりたいと思えた出会いでした。このような有意義な企画を立ててくださり、

ありがとうございました。一生忘れないと思います。子どもたちにも伝えていきたいと思っています。

◆「被災地交流ツアー」に参加して、現地の今の状況を見て、あれから5年という月日が流れているにもかかわらず、まだ復興できていないところが多々あることに驚かされました。私が一番印象に残っているところは、宮城県気仙沼向洋高校です。特別に中を見学させていただき、津波の恐ろしさを目の当たりにしました。3階の教室に自動車が突っ込んでいる状態に、今見えている穏やかな海がそこまで変貌したかと思うと、恐ろしさと胸がしめつけられるようでした。そこで、貴重な体験談も聞けました。誰もが想像できなかった大きな津波・・・助かっていたのに、自宅に戻って津波にあってしまった方・・・いろいろ飛び交う情報に翻弄されながら、逃げまどう様子。最終的には、自分の意思をしっかりと持っていた方々が助かったのではないかと感じました。自分の身は自分で守る気持ちが大変だと感じました。最後に、気仙沼高校の先生方、生徒さん。宿泊先を提供して下さった名取高校の先生方・・・皆様の優しさ、親切さ、もてなしの心。とても感謝しております。本当にありがとうございました。この企画に参加できて良かったです。

◆自分の中で震災が風化しかけていました。当時のままの気仙沼向洋高校、名取市閑上での話は特に印象に残り、いろいろと考えることができました。実際に見なければ分からないことを知ることができたので、参加して良かったと感じました。

◆被災地を巡るたびに、また案内をして下さった方たちのお話を伺うたびに、改めて震災の恐ろしさ、震災が及ぼす影響の大きさを痛感しました。温かく私たちを迎えて下さる高校の先生方、地元の高校生に触れ、人と人とのつながりの温かさに感謝するとともに、日頃から交流を大切にされている秦野高校教職員の方々に感動しました。秦野高校で学べる生徒さんたちは幸福だと思います。このような会に参加させていただき、感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。どのコースも良く計画されており、校長先生たちの“想い”のようなものも十分感じさせていただきました。閑上はもう少しゆっくりと廻りたかったです。

◆皆様の良識ある行動と暑過ぎず寒過ぎずの天候にも恵まれ、救護者ゼロで終えることができました。武道館宿泊では、広々とした清潔な保健室を提供いただけたことで、女性は気持ち良く更衣ができ、とても助かったのではないかと思います。調子に乗っている秦野高校、やりますね。さすがです。

◆震災後6年目にしてようやく被災地を巡ることができました。何回かの機会を逃してきた私は、このチャンスを与えて下さった校長先生に感謝します。今まで聞き及んでいた各種の交流（視察、支援、ボランティアなど）事業に比べても、はるかに内容・密度の濃いことに心がふるえました。何よりも、交流していただいたすべての関係者の対応が、直接的体験に基づく説得力に満ちた迫力がありました。気仙沼向洋高校の校舎内見学は、強烈そのものです。陸前高田の最初の説明、村上様のユーモアセンスに希望をもらいました。それでいて、「お涙ちょうだい」的に流されない芯の通る企画になっていたことは感動でした。「こんな時こそ、笑顔で進もう」の呼びかけスローガンが名取高校の廊下（玄関）に掲げてあったのもホッとするとひとコマでした。私自身は高齢になり、民生児童委員としての心がまえでこのツアーに参加しましたが、現役の高校生とともに行動できたことが、一層有意義な体験となりました。本当にありがとうございました。名取高校での大人のワ

ークショップ、心こもる対応も、またまた印象深い内容でした。「閉上の記憶」も心打つ見学場所、交流でした。「お涙ちょうだい」ではないのに、涙があふれるのを禁じえず、私もほほをぬらしてしまいました。線香を手向けるのも、碑をさするの、心より行動できました。やすらかなれ！御霊よ！

◆私はふだん知的障害をもった方々の支援を行っています。常日頃大きな災害が起きた時には、どのような対応をすればよいかを考えます。もちろん、マニュアルはあるのですが、その時その時の状況や利用者の方々一人ひとりの状況などで対応が変わることがあります。そんな時に、まず“命を守る”ことを第一に考えることが大切であると先輩たちから教えられてきました。しかしながら、現在まで、幸いなことに、そのような大きな災害には出会っていません。今回被災地に行き、自分の目で見て、自分の耳で先生方の話を聞き、やはり命を守ることが大切であることを改めて認識することができました。今回のツアーで学んだことを自分の職場に持ち帰り、他の職員にも話をして、皆と共有することができればと思います。また、家族とも防災について考える機会にしたいと思っています。今回貴重な機会をいただき、ありがとうございました。今回のツアーでは、私が高校生のときの恩師である久保寺先生と実に 30 年ぶりにご一緒させていただきました。この機会を作ってくれた息子にも感謝したいと思います。ありがとう。

◆最近、テレビなどで東日本大震災についての報道がほとんどない中で、今回のツアーで被災地の現状を知ることができて、良かったです。村上育朗先生や佐藤正憲先生、気仙沼高校、名取高校の先生方生徒会の方など被災した方々が被災した場所を案内してくださったり、いろいろな話を聞かせてもらい、とても勉強になりました。気仙沼向洋高校は被災した当時のまま残されていて、そこに特別に入ることができ、内部を詳しく見ることができ、貴重な経験になりました。今回のツアーでは、いろいろなことを学びました。まずは、地震があつたら、とにかく高台へ逃げることです。自分は比較的高台で、海も遠いのですが、海の近くにいたりしたら、防潮堤があるからと安心しないで、とにかく高台に逃げなければならぬと思いました。次に、自分が住んでいるところの地形をよく知ることです。気仙沼高校では、地形と津波との関係を知ることができ、自分の家の周辺の地形を調べなければいけないと思いました。今回、名取高校の武道館で寝ることができ、避難生活を体験することができました。今日は寝具はなく、寝づらかったですが、他はだいたい準備することができたので、あまり不便ではありませんでした。いざという時には、ほとんど何もない状態なので、相当つらいのだと思いました。また、電気、食料、寝るところ、日々普通の生活が送れている幸せを感じることができました。他にもたくさんを知ることができ、とても良かったです。今回のツアーに参加することができて、本当に良かったです。ありがとうございました。また、このような機会があれば、参加したいです。

◆まさに、「百聞は一見にしかず」というツアーでした。テレビでずっと観てきた光景が、実際に見てみると、「何であの奇跡の一本松が残ったのか」ということや、10mもの堤防が勝手に造られていること、「釜石の奇跡」が他にも起こっていたなど、気づくことがたくさんありました。2日目に、佐藤忠司先生の話が気仙沼高校でお聞きして、1年生の時の地理の学習がここで必要なんだっていうくらい地理用語や物理の用語が出てきて、びっくりしました。実際に見てみるとということがいかに大事かが分かりました。津波が 30mも来たといわれても、それがどんなことなのかよく分かっていませんでしたが、気仙沼向

洋高校の4階部分に行ってみたり、津波の高さが分かるモニュメントを見たりして、これほどのものだったのかということを実感しました。だんだんと復旧・復興が進む中、津波や地震がどれほどのものだったのかということが分かりました。村上育朗先生の話の中で『若い人は先に逃げなさい。』というのが印象に残りました。地震が起きたとき、自分たちが老齢の方や障害をもった方を助けなくては、避難所に連れて行かなくては、と思うのが当たり前だと思っていましたが、「生きなきゃいけない人が生きなきゃいけない」というのは複雑ですが、まず自分たちが未来のために生きなきゃと思います。地震が起きても、無線が使えるか分からない、情報網が動くか分からない時に大切なのは、自分の直感で動くしかないということをお教えしてもらい、そういう事態も想定しなくてはと思いました。今回のツアー全体を通して、他校の生徒会の方々やいろいろな世代間の交流があり、自分の人生にとってとても良い経験になりました。東北に行くという機会も与えていただき、充実した3日間を過ごすことができました。人生初の車中泊も寝ることはできませんでしたが、休憩所ごとのおしゃべりは楽しく、あっという間の7時間でした。被災された方の話が一番説得力があり、心に響いてきました。今回のツアーで見学や体験したことをたくさんの人たちに伝え、東日本大震災を風化させないことが、まず自分にできることだと思うので、役目を果たすことで、少しずつ東北に貢献することができたらなと思います。3日間ありがとうございました。

◆今回初めて被災地に来ました。本当なら起きた時にすぐにボランティアで来たかったのですが、都合がつかず、それでも今回参加できたので、良かったです。村上育朗先生の話は、被災した立場からの視点で、今の私たちに対して、とても刺激を与えてくれました。特に、シャワーの水を1回1回止めること、義援金と支援金と寄付金の違いの話には、被災したからこそ分かることで、そのような貴重なお話を聞いたことは、ぜひ今後に生かしていきたいです。「閑上の記憶」では、津波の映像を見て、改めてこの地で2011年に起きたことの恐ろしさと風化させてはならないという思いを強く感じました。被災された方の中には、そのような思いがあり、跡を残しておいてほしいという方とつらいからもう見たくないという方の両方があり、複雑な気持ちになりました。また、慰霊碑を見て、当時の中学1年生は自分と同年なので、その子たちの分まで生きなければならないと思いました。本当に貴重な体験となりました。これからは自主的にも伺いたいと思います。ありがとうございました。

◆初日、バス泊の時も2時間おきに休憩でき、合間もよく眠ることができました。土曜日の体験も心にしみるが多く、貴重な体験ができました。気仙沼高校や村上育朗先生、名取高校の先生方が一生懸命動いてくださり、とても感動しました。私も、私の家族も、目的を持ち、笑顔で過ごせるよう、頑張ります。名取高校の武道館も消灯時刻を守り、静かに過ごせたのが良かったと思います。女性に保健室を空けていただき、着替えの場所や顔洗いの場所があるだけでも、心がとても落ち着きました。集団でいる中で、少しの時間でも区切られた場所にいられる自由は大切だと思いました。参加させていただき、ありがとうございました。

◆震災当時の復興の進み方を自分の目で見て感じたことや、震災当時の状況などを現地の人から聞くことによってより鮮明にイメージすることができました。ここで学んだことを自分のこれからのどうやって取り入れていくのかを考えることが必要なのではないかと

と感じました。

◆初めて被災地を直に見て、話を聞いて、1日だけ武道館で寝泊りをして、大変だなと思いました。でも、実際に被害を受けた人たちはもっと大変だっただろうなと思いました。沿岸の方に行ったら、ほとんどの建物が撤去されてさら地になっていて、本当に何もかもが津波によって流されてしまったことを実感しました。仮設住宅では、地元の方に観光客と勘違いされたか分かりませんでした。どなられて追い返され、申し訳ないことをしてしまったと思いました。でも、村上育朗先生の『苦しい時ほど、笑っていた方がよい』という言葉を知り、先生も津波でたくさんの大切なものが流されてしまったのに、すごいなと思いました。実際に、津波を受けたまま何も変わっていない気仙沼向洋高校の中に入って、学校に入ってきたガレキや車、散乱した教科書、ノート、筆記用具、壊れていた階段、窓ガラスを見て、津波の破壊力、恐ろしさを感じることができました。涙ながらにあの日のことを語ってくれた被災者の方たちの話を聞いて、自分も自然に涙が出てきました。あの日が卒業式で、もうすぐ高校生になれた先輩たちや津波の警報が出されていたのにもかかわらず、ここには津波は来ないと思い込んだ人たちや、避難指定場所に避難してここなら安全だと思い込んでしまった人たち、その人たちは普通に来るはずの明日をいきなり奪われてしまい、とても悲しくて、悔しかっただろうと思います。テレビで見て聞いた被災地と、自分の目で直に見て聞いた被災地はまったく違いました。家にちゃんと着いたら、友人たちに自然災害の恐ろしさ、いつもしているあたりまえのことがどれほど大切なのかを伝えていこうと思います。

◆『苦しい時こそ笑いを忘れない』と語られた村上育朗先生の案内はありがたかったです。先生のように語り継がれる方もいらっしゃるれば、私たちのようにバスで乗りつける人たちを観光者と見て受け容れられない方もいると実感しました。被災地を直に見て、被災された方の話を直に聞いたことは、何よりの経験になりました。名取高校の武道館での宿泊、先生方のおかげで恵まれたものになり、ダンボールの使い方も経験できました。敷き布団にも掛け布団にもなる。被災しているわけでもないのに、豚汁のあたたかさがしみいました。閑上地区では、涙を抑えるのが大変でした。佐藤正憲先生の涙も忘れられません。今回、このようなツアーに参加させていただき、本当にありがとうございました。

◆今回のツアーで訪れた場所は、いずれも初めて訪れる場所でした。被災地のことは写真や動画、新聞、書籍等で知ることはいくらでもありましたが、今回訪れたことで、この震災がより自分の問題として意味を持ったように思います。また、一度だけではなく、二度、三度と何度も訪れようと思いました。今回訪れた場所に限らず、いろいろなところに足を運び、自分の目で見て回ろうと思います。今回のツアー実現にご尽力いただいた方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。

◆東北の被災地には、ずっと訪れてみたいという思いがありました。多くの被災者や支援に行かれた方のお話を伺うたびに、この目で確かめなくてはと思っていました。創立90周年の記念事業で、車中泊、武道館泊、また風呂やぜいたくな食事のない中、温かい布団や食事のありがたさも身にしみました。各地で案内された先生方の話に、何度心が痛かったことか分かりません。この経験を私だけのものとするのではなく、一人でも多くの人に伝えられたらと思います。企画をしてくださったことに感謝しています。ありがとうございました。

◆実際に被災した方の生の声を聞くことができ、大変貴重な時間を過ごすことができました。また、話だけでなく、実際の現場を見ることで、他人事ではなく、自分のこととして、未来に向けて考えるきっかけとなりました。3・11を境に、現地の方は日常生活から非日常生活を送ることを余儀なくされましたが、レベルは違うにせよ、我々もこの2日間は非日常生活を体験する貴重な2日間となりました。日常、会社員として業務に追われる毎日ですが、時にはこの非日常的なことを通して、神戸校長がおっしゃるよう、我々大人も視野を広げていくことも重要であると感じました。息子は何を感じたか分かりませんが、学校としても、このような体験を多く経験させていただければと切に願います。今回、多くの方のお話を伺いましたが、人との関わり、人脈、コミュニケーションも貴重な財産と思います。温かい方々ばかりで、そのような人と触れ合うことで成長することもできますので。記憶よりも記録が重要とも思います。先生方の貴重なお話にもかかわらず、メモをとっている姿はあまり見られなかったように思われます。ぜひ、今後の指導として、メモをとるクセをつけさせていただければと思いました。

◆今回のツアーを通して、津波による被害の大きさを改めて感じた。震災で失われた数え切れないほどの命。そのことを常に心の片隅において、自分があたりまえだと感じている生活に日々感謝して暮らさなければならぬと感じさせられた。人と人との助け合いがとても重要。熊本の地震の時、自分は募金することしかできなかったが、その思いを大切に、今後災害が起こった時などに、積極的に活動していければと思う。

◆参加させていただき、ありがとうございました。実際、被災地に来てみると、思っていたより「復興」は進んでいなくて、今もなお仮設住宅で生活したり、仮設校舎で勉強している方がたくさんいて、大変驚きました。5年4カ月経っても、まだまだこれからなのだと実感しました。そして、「命を守るのは瞬時の的確な判断」「チェックリスト的な防災教育からの脱却」「瞬時の判断を下せる訓練を積む」これらのことが大事なんだと勉強になりました。また、地元の方や協力高校の皆様のおもてなしや気遣いも大変ありがたく、勉強になりました。もっと多くの生徒たちに参加してほしいです。

◆震災から5年4カ月という年月を経た被災地の状況をテレビや新聞だけではなく、自分の目で確認したいと思い、このツアーに参加した。初めて被災地に行ったが、実際に見るのは、メディアと違って、印象的なことが多く見られた。復興に向けて頑張る人々の様子が特に伝わってきた。私はここに来るまで、被災地の状況は良くないのだろうかと思っていた。道が整備されていないところが多くあったり、廃棄されたガレキなどのごみが処理までまわらず、仮に置いてあるのだろうと。実際、現状を目の当たりにして、手が回っていないところは少々あるものの、前向きに一步一步復興に向けて努力してきたことが確認できた。これは一人ひとりが力を合わせないとできないこと。そこから、私は改めて協力することの大切さを学んだ。道路や海周辺はきれいに整備されてしまった反面、何もないという印象を受けた。今までにぎやかで盛んだった街を白紙に戻したようで、そこから新しく始めなくてはならないと思うと、津波や地震の大きさがどれだけ大きなものだったのかひしひしと伝わってきた。東日本大震災という人々の生活や家族、友だちなどたくさん大切なものを失わせた災害の影響は非常に大きく、風化させてはいけないと思った。私たちが大きくなって社会を担うようになる頃には、日本はどうなっているのか、何が起きているのか、なんて想像できない。また大きな災害が起きているかもしれない。私は次に

社会を担ってもらう世代にこんな苦しい思いをさせたくない。今回のツアーに参加し、そんな風に思った。「自分の身は自分で守る」「津波が来ることを前提に防災について考える」そして何よりも、「風化させてはいけない」。日常だった生活が非日常となってしまう日が来ても、命だけは助けるために、この3つはしっかりと心に留めておきたい。

◆被災地には一度参加してみたいと思っていたので、このツアーに参加することができて、本当に良かったです。個人またはツアーでは訪れることができないところに足を踏み入れることができ、貴重な体験ができました。テレビで観るのとは違って、今でも震災のすごさを感じることができました。復興は進んでいるとはいえ、それが先の見えないものであったり、地域の人々の望むものではなかったり、疑問や矛盾も感じました。武道館で寝ることは初めてでしたが、これが実際に避難生活であったなら、どれだけ大変なものか多少でも感じる�ことができ、良かったです。今回必要なものを被災地で買うことも復興の一つ、という思いには賛同いたしましたが、コンビニではなく、地元系のスーパーに寄っていただいたほうが貢献できたのではないかと思います。

◆被災地を訪問したのは初めてだったので、良い経験となりました。東日本大震災から5年数カ月経ったとはいえ、当時の生々しい被害が残っている被災地からは、東北の人たちの当時の様子をかいま見ることができたと思います。また、新しい家が建っていたり、道が整備されているところは、東北の人たちが一生懸命復興してきた証だと思いました。この被災地からは学ぶべきことがものすごくたくさんあると思うから、できる限り学んで、自分の住む街に生かせたらいいと思います。

◆東日本大震災から5年が経ち、震災のことを忘れ始めていました。このツアーに参加し、被災地の現状や被災された方々の話をお聞きしたことにより、まだまだ震災は終わっていない厳しい現状が分かりました。私たちのできることは、震災を風化させない、岩手や宮城の方々の経験したことを教訓にして、自分たちも危機意識を持ち、いざという時にしっかり行動できるようにしたいと思いました。また、村上育朗先生をはじめ、気仙沼高校や名取高校の皆さんに温かく迎えていただき、本当に感謝しています。また、その優しい心遣いに感動しました。私がもし逆の立場になった時も同じようなことができたらいいなと思っています。早速、秦野に帰ってから、私が見てきたことや体験してきたことを身近な人に知らせていこうと思います。最後に、このツアーを企画し運営してくださった秦野高校の先生方、ありがとうございます。2日目に閑上のお話をしてくださった小齋さんの心の広さにも感動しました。自分が被災しているにもかかわらず、支援してくれた人への感謝の気持ちを忘れずに、地元の子どもたちやその保護者の方たちへの心のケアなどお話を涙が止まりませんでした。また、車内で説明してくださった佐藤正憲先生の涙にも感動しました。

◆陸前高田の市内を行き交うダンプカー。5年経った今も日々復興に向けて動いているのを実感しました。そして、仮設住宅に住まれている方の姿に、あたりまえであった日常生活がまだ戻っていないのも感じました。そう感じた大きな理由は、何人かの被災された市民の方にお会いしましたが、他県から来た私たちに対して、観光＝遊び＝興味本位であるかのように思われていると感じる場面があったからです。かさ上げ工事も進んでいますが、さら地やまだ手付かずの場所を見ると、何もないことがとても不自然で、それと同時に、津波の被害の大きさを知りました。今回の「被災地交流ツアー」で震災後初めて東北を訪

れました。テレビから流れてくる映像でしか見たことのない被災地を目の当たりにして、ニュースでは伝わってこない被災地の本当の姿、そして被災された方のきれいごとではない本音を見聞きできました。今や日本全国どこで、いつ、自然災害の被害にあうか分かりません。被災地の方の体験を教訓に、日々備えと覚悟を持たなければと思いました。

◆陸前高田駅でBRTのバスの運転手さんに『ルールを守れ！』と言われたのが、私の東北との初めての出会いでした。現地の人にしてみたら、遊び気分観光に来ている・・・そう思ったのでしょうか。私は「ようこそ」という歓迎の気持ちではないことに勝手にショックを受けました。でも、奇跡の一本松を案内してくださった村上育朗氏のお話を聞いたり、気仙沼高校の生徒会の生徒さんたち、名取高校の先生方はじめ生徒会の生徒さんたち、閑上を案内してくださった佐藤正憲さん他この企画・運営に携わってくださった皆様の熱い熱い思いに心を揺さぶられました。本当にありがとうございました。気仙沼向洋高校の校舎内に取り残された車や散乱した品々を見学できたことは、校長先生が全国にネットワークを広げているからだ実感できました。自宅に帰ったら、防災・減災・対策について、子どもたちとこのツアーの意義を話し合いたいと思います。

◆ツアーの冊子と一緒にいただいた「あの日のこと」、涙なしには読めませんでした。年月が経ち、『支援はもうよいのでは』という声をちらほら聞き、私自身そう思っておりましたが、改めて支援の必要性を感じました。いろいろな事業も、もっと地元や被災された方の声を聞いて行う必要があるのでは、と思いました。村上育朗先生のユーモアたっぷりのお話、『大変な時こそユーモアが必要』、そのとおりだと思います。気仙沼向洋高校での校舎の中の車、衝撃的でした。皆さん被災され、つらい思いがある中で、私たちに伝えようとする気持ち、手厚く歓迎してくださる心、に感謝の気持ちでいっぱいです。武道館に一晩泊まって、他の人の動き、声、床に直に寝る、そんなことの大変さが身にしみました。この状態を秦野に帰って、家族や友だちに周知していきたいと思います。閑上地区の話、佐藤正憲先生、遠藤吉夫先生は教師という立場でありながら、ご自身の体験談をお話しいただいて、とてもためになりました。佐藤正憲先生の最後の涙、忘れられません。

◆実際の被災者の方のお話を聞けたり、同じ高校生の意見を共有できて、良かったです。また、奇跡の一本松の見学や気仙沼向洋高校の見学はとても印象に残っています。DVDの視聴も被災地の“今”を知るきっかけになり、良かったです。最後に、このようなツアーに参加させていただき、ありがとうございました。とても良い経験になりました。

◆陸前高田では村上育朗先生、気仙沼、南三陸では気仙沼高校の先生方をはじめ、2日目もご案内くださった先生方の分かりやすい説明や体験に基づくお話に非常に感動いたしました。気仙沼では、塩害に強いレッドロビンの苗木を植樹させていただくサプライズもありました。また、宿泊させていただいた名取高校のご配慮。閑上地区での涙、涙の見学など、私たちが歓迎してくださったことは、一生忘れられない思い出となりました。これも秦野高校校長先生の日ごろの交流の賜物だと思います。このような企画に本当に感謝いたします。また、初日、陸前高田に到着した時に、BRT専用道路を歩いてしまったために運転手さんに叱られてしまったこと。仮設住宅の住人の方に『帰れ！』と怒鳴られてしまったこと。必ずしも、私たちを受け容れている人ばかりではないことも、5年以上経っても、東日本大震災のあの悲惨なつめあと、光景を見るにつけ、現地のありのままを知ることができたのです。今回、このようなすばらしい貴重な体験をさせていただき、本当にお

礼を申しあげます。秦高PTAであったこと、校長先生をはじめ、このツアーで出会った皆様を誇りに感じています。さすが秦高です！！

◆気仙沼高校の生徒は、自分たちが思っている以上に保存食やトイレの問題をしっかりとしたほうが良いと言っていたので、家に帰ったら見直してみたいと思う。メディアなどでは復興が進んでいるように報道していたが、実際は、人が少なくなっていて、街自体はまったく復興していないので、やはり違いがあるのだと思った。

◆忘れないうちにということで、“豚汁”とてもおいしくいただきました。温かい豚汁はやっぱりほっとします。実際にこの地を訪れることができ、そこで暮らす方、震災を体験された方、被災された方にお会いし、お話を聞くことができたことは、貴重な体験でした。生の声を聞くことで、自分に置き換えた時、また考えさせられることもありました。今なお、復旧・復興には立場の違いによる相違・課題が山積していることも、現地に行って強く感じました。大きな地震、大きな津波は計り知れないものを残していきました。私がこの体験をどこにつなげて、どのように生かしていくか、しっかり考えたいと思います。まずは、どこかで、いろいろな方法でつながっていること。子どもたちには生き抜く力を。私たちを見送ってくださる姿に、お心に、感動と感謝でした。今回のツアー、何から何まで本当にお世話になり、ありがとうございました。

◆ツアーに協力してくださった方々に感謝です。やはり「百聞は一見にしかず」ですね。また、地区によって、いろいろな復興の問題があることもお聞きすることができました。たくさんの方々に奪った津波。また、親を奪われて残された子どもたちの心の痛み。近い方を奪われた悲しみ。それを受けとめて、語ってくださる方々の思い。いろいろな思いを感じ、受け取った貴重な時間でした。自分はこれから何ができるのだろうかと考えさせられました。まずは、家族と備えと心がけについて話したいと思います。

【今度の防災活動にどう活かしていくのか】

今回お話しいただいた中で、次の言葉が特に参加者の心に響いたようです。

- ・『まず、自分が生きることを考える』（自助） ⇒ 共助
- ・『地震を正しく恐れる』
- ・『命を守るのは瞬時の的確な判断』

個人として、家族として、地域として、どのように防災（減災）に取り組むのか？

そして、秦野高校として、人の命を守るために、どのような活動に本気で取り組んでいくのか。地域との連携をどのように進めるのか。被災地の多くの方が「チェックリスト的な防災教育からの脱却」を指摘し、私もその通りと考え、有効な方策を模索しています。

この項目については、教職員、生徒、保護者、地域が協働して検討を進め、後日別の機会に報告させていただきます。

【「東日本大震災 被災地交流ツアー」報告を予定しています】

- ・ 広陵祭（文化祭） 9月2日（金）、3日（土） 会場：秦野高等学校
- ・ 防災フォーラム [秦野市&大根地区自治会連合会主催] 地域の小中高大が協力
10月1日（土） 会場：東海大学
- ・ 創立90周年記念事業「展示会」 10月 会場：秦野市文化会館

【参加者の心を揺り動かした言葉たち】 ※事前学習用配付資料、当日提供資料より

■防災学習の際、私が常に生徒たちに伝えている言葉がある。「防災とは、ただいまを言うことです」「いってきます」と出かけたなら、必ず「ただいま」を言う。それが、毎日続いてほしい。あの日言えなかった、聞けなかった、たくさんの「ただいま」があるのだ。こんなことを、繰り返していいはずがない。あの日を、ただのつらかった過去にしてはいけない。あの日を語ることは、未来を語ることなのだ。

※佐藤敏郎様より使用許諾済み 『16歳の語り部』佐藤敏郎様（ポプラ社）

■「もしもはいつものなかにある」。これは私が防災教育をしていたときのキャッチフレーズです。「もしも」はいろいろな意味にたとえられますが、「あのとき」大事だったものは普段から大事なものだということです。命なんてまさにそう。震災のときだけ大事なわけじゃないし、あのときよく使われた「希望」や「絆」という言葉も、むしろ震災じゃないときこそ大事なものなのです。水や食料の備えはもちろん、習慣、信頼など災害時に必要なことは、ふだんから大切にすべきものだったと気づきました。

インタビュー 小さな命の意味を考える会 代表 佐藤敏郎様

■「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ。」「災害発生時に生死を分けるのは、どれだけ災害を意識しているかどうか。」「災害に限らず人との死別は突然来る。その時に後悔しないように、一日一日を大切に生きる。」「想定にとらわれるな。」「最善を尽くせ。」「率先避難者たれ。」

名取高校ワークショップ「東日本大震災から考えてみよう」資料より

■震災後、書ききれないくらい、本当にたくさんの経験をしました。大事なものもたくさん失いました。逆にたくさんのものを得ることもできました。私はこの経験から、大事なことは「頑張ること、逃げないこと、乗り越えること」だということを学びました。

・あの日、あの時、あの瞬間、生かしていただいたこの命。私たちは絶対に、このことを忘れてはいけないと思います。今の自分にできることは少ないかもしれませんが、でも、少しでも力になりたい。この気仙沼の地が以前のように戻れるように・・・。

・震災後5月になり、西高での生活が始まったが、とても辛い日々だった。学校までのバスは、朝がとても早かったし、なんととってもアウェー感がとても辛かった。でも、辛く苦しい日々を過ごしたことで、些細な事も大きな幸せに感じられた。平成23年11月。ついにプレハブ校舎ができ、そこでの生活は、毎日が幸せで楽しかった。向洋高校が1つに集まることの嬉しさを感じていた。他の人が絶対に味わえないようなことを体験していることがとても嬉しかった。

・震災を考えると、返してほしいものがいっぱいあります。校舎も思い出も友だちも、何もかも返してほしい。これが自然の天罰ならば、あまりにも残酷です。しかし、この震災により私にとって大切な多くの出会いがありました。みんなという時間も楽しくて幸せで

す。失ったものは多かったです。でもそれに負けないものを得ることができたと思います。私たちは強くなったと思います。今、こうやって笑えているのもみんなのおかげです。ありがとう。

・震災当日の階上中学校での夜は、雪も降るととても寒さの厳しいものでした。待機するなかで、父親が迎えにきて帰宅となりましたが、2日目は何もすることなく、ただ余震が続く中を過ごしました。3日目の朝、ふと思い立ったのがこれから学校はどうなるのだろうという心配で、私は父親と向洋高校を見に行き、そこで見た光景に呆然と立つのみで言葉になりませんでした。現在、仮設校舎での学校生活にも慣れ、設備はなかったりして、まだ大変ですが、勉強できるということには感謝しなくてはなりません。

「宮城県気仙沼向洋高等学校 東日本大震災の記録」(平成25年8月)
決して忘れない ～平成24年度卒業生の作文より～

ご協力いただきましたすべての皆様に深く感謝申し上げます

本文中に使用されている写真のうち、40枚は参加したPTA広報委員会にご提供いただきました。いつもご協力を賜り、感謝いたします。
(撮影約1,000枚)



「三陸新報」平成28年7月17日版